ISSN 0386-4502

健やかな未来を確かな情報で支えたい

あいみっく

2022年9月
Autumn
Vol. 43-1

renewal

IMIC創立50周年記念号

IMIC
International Medical Information Center
一般財団法人 国際医学情報センター

INDEX

IMIC50年、そして次の創立100年に向けて 1
一般財団法人 国際医学情報センター
理事長　戸山 芳昭

Special MESSAGE 2
アステラス製薬株式会社
メディカルコミュニケーション部
御幸が丘図書室　宮内 洋一 様

株式会社ヤクルト本社
医薬営業部
くすり相談室　山崎 謙輔 様

Meiji Seika ファルマ株式会社
信頼性保証本部
安全管理統括部　松井 大介 様

一般社団法人日本癌学会
理事長　佐谷 秀行 様

承前啓後 5
国際医学情報センターの50年
一般財団法人国際医学情報センター前評議員
元慶應義塾大学環境情報学部教授
元慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務長
澁川 雅俊

IMIC創立50周年に寄せて 8
高田 宜美

HISTORY of INTERNATIONAL MEDICAL INFORMATION CENTER 10

IMICサービス案内 20

広報委員会
「あいみっく」リニューアルチームより

「あいみっく」は、賛助会員である製薬企業や病院・研究機関への情報提供を目的として、1977年に創刊されました。2022年に財団創立50周年を迎え、この度『あいみっく』は、財団オフィシャル広報誌としてリニューアルいたしました。多角的にIMICの魅力を伝えることはもとより、読者の皆様の興味を惹くコンテンツも企画し、皆様に求められ喜ばれる『あいみっく』を目指してまいります。

IMIC50年、そして次の創立100年に向けて

一般財団法人 国際医学情報センター
理事長　**戸山 芳昭**

一般財団法人 国際医学情報センター（IMIC）は1972年(昭和47年) 4月1日、慶應義塾大学信濃町メディアセンター（北里記念医学図書館）を母体に財団法人として発足後、2013年（平成25年）には一般財団法人へと移行し、今年で創立50年を迎えました。

当財団の広報誌「あいみっく」はIMIC開設から5年半遅れの1977年（昭和52年）11月に創刊され今日に至っています。よって、「あいみっく」創刊後45年半が経過し、昨年まで合計42巻、年間４号を基本に発刊してまいりました。この間、ご愛読いただいた皆様から多くの貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。また、お忙しい中、御執筆をお願いして快くお引き受けいただき、その時代の、その時々の大変興味ある最新・最先端の医学・薬学情報等をご寄稿くださり、改めて感謝申し上げる次第です。本誌が、ご愛読いただいた皆様の医学・薬学情報に少しでもお役に立てていれば幸いです。

そんな中、IMIC創立50年を迎えた現在、本誌「あいみっく」をリニューアルし、次の50年、創立100年に向けて新たな広報誌としてスタートすることに致しました。これからは、従来の最新医学・薬学情報等に加え、私どもIMICが行っている事業をよりご理解いただくための内容も盛り込む予定です。ご愛読いただいてきた皆様には、引き続き新しくなった本誌「あいみっく」を、お時間のある時にでもご一読いただければ幸いです。

ところで、昨今の医学界、製薬業界を取り巻く環境は大きく変化し、ＩＴ、ＡＩなどの進歩と相まって、現在の医学情報産業も大きな変革期、曲がり角にあります。このような現状を踏まえ、将来を展望し、これからもIMICの利点、特徴を生かしつつ、IMIC－次の50年に向けての基本方針を以下のように致しました。

その方針は、

①一般財団法人として営利事業の分野と公益事業の分野を共に有する組織として運営／経営を行う
②AIを含め、IT技術の導入を積極的に進め、より専門的で精度の高い医学・薬学情報を国内外に提供し得る国内トップの医学情報センターを目指す
③今後も製薬企業との連携を深めつつ、将来的には大学（病院）や研究機関とも連携して学術分野への事業展開を模索する
④保有する医学・薬学情報を一般の方々にも解り易く提供し、国民の健康維持・増進に貢献することです。

以上のような運営／経営方針に則り、次の50年に向けて再出発いたします。これからのIMICを、リニューアルした広報誌「あいみっく」でぜひご覧ください。

次の50年、IMIC創立100年に向けて、IMICは皆様から信頼され、常に最先端の医学・薬学情報を正確かつ迅速にお届けできるように、今後も職員一同 “One Team” となって努力していく所存です。そして、リニューアルした当財団広報誌「あいみっく」が少しでも皆様のお役に立ち、末永くご愛読いただければ幸いです。

メッセージ

Special MESSAGE

IMIC創立50周年に際し、
多くの関係者の方々から
メッセージをお寄せいただきました。
その一部を誌面にてご紹介いたします。
（順不同）

変化を的確にとらえ 製薬会社に欠かせない サポートツールに

アステラス製薬株式会社
メディカルコミュニケーション部
御幸が丘図書室
宮内 洋一 様

創立50周年おめでとうございます。人間の年齢で考えると天命を知る年に達したことになりますでしょうか。

私が業務の上で初めてIMICと関わったのは、相互貸借業務を担当しているときでした。当時弊社（旧山之内製薬）はJMLAに加入している数少ない製薬企業の一つで、私が入社して間もない時（80年代中頃）は、テレックスで複写をお願いする毎日を過ごしておりました。そのテレックス送信が90年代～2000年にかけての通信技術の発達に伴いFAX、eメール、webと次々と変化していったのを覚えています。そして、雑誌も冊子体から電子版へ、各種の連絡も手紙からメールやweb配信へと変化しいきそれに沿ってIMICのサービスも常に最先端の時流をとらえてバージョンアップを繰り返していったと記憶しています。

IMICのサービスは情報伝達技術革新の変化を素早く的確にとらえて、私たちのニーズに沿ったサービスを展開していただき、今ではSELIMIC web/AlertやI-disなどは製薬会社には欠かせないサポートツールとなっています。

また、この50年間での大きな変化一つとして、インターネット経由の情報伝達技術の発達と検索プラットフォームの革新によるエンドユーザーサーチの広がりも上げたいと思います。90年代半ばまでは、学術情報やデータベースサーチといえば医学／薬学の図書館員あるいは、情報調査担当者の専任業務でしたが、今では医学／薬学の業務に携わる者ならばだれでも、その業務に必要とされる情報入手用のデータベースや情報提供サービスにアクセスして「検索」を行うようになり、業界でインフォプロといわれる人たち以外でも「検索検定」を受験する時代となりました。

IMICにはこのような情報環境やユーザーの幅の変化及び、広がるユーザーニーズをタイムリーにとらえ、それらにしなやかにかつ的確に対応しながらこれからも医学/薬学情報提供の礎として医療/医薬の現場を支え続けていただくことを期待しております。

医薬品業界を 情報で足元から支える 長年積み重ねた信頼

株式会社ヤクルト本社
医薬営業部
山崎 謙輔 様

IMIC創立50周年、誠におめでとうございます。貴財団のさらなるご発展を祈念いたします。

さて、貴財団は、この医薬品業界を、情報で「足元から支える」といった活動やサービスを長年にわたって続けてこられ、今に至っているのではないでしょうか。また、それには各方面への積み重ねた信頼があってのことと思われます。

弊社では主に、自社製品関連の社内文献データベースの構築に、かねてより多大なるお力添えをいただいております。きめ細やかな対応をしていただくこともしばしばです。例えば文献情報総合管理システム「I-dis」については、その導入前より、こうした機能を実装して欲しいという弊社の身勝手な注文を聞いていただきながら、構築・改良を加えていただけた部分もあったかと思います。おかげさまで、現在この「I-dis」を活用し、MRを通じて医療機関様への迅速でスムーズな情報提供をすることが可能となっております。

システム構築もそうですが、文献複写・検索、データ収集、著作権処理から、各種有益な研修会へのお誘いに至るまで、日頃からきめ細やかなご対応・ご提案をいただいていることに大変感謝しています。まさしく良きパートナーです。私自身、これまでに、弊社で困った時にも、快く相談に乗っていただいた様々なご担当者様のお顔が、すぐ思い浮かんでくるほどです。

こうしたきめ細かな対応を振り返るに、製薬企業各社様から得られている信頼も並々ならぬものがあるのではないか、それがこの半世紀の歩みにつながっているのではないかと感じております。

次なる50年へ今まさに歩みだそうとする貴財団に、今後とも心より期待しています！

時代に即した提案で 市販後安全管理業務を 適切に行えます

Meiji Seika ファルマ株式会社
信頼性保証本部
安全管理統括部
松井 大介 様

この度は、一般財団法人国際医学情報センター様が創立50周年を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

私は、Meiji Seikaファルマ株式会社で安全管理責任者として、市販後安全管理業務を遂行しておりますが、文献情報収集をはじめとした様々な業務で、日々、一般財団法人国際医学情報センター（以下IMIC）様のご支援を頂いております。

IMIC様とMeiji Seikaファルマとのつながりを振

り返ると、その始まりは弊社がまだ明治製菓株式会社であった平成17年でした。当時、エイズ事件による安全対策の強化策として薬事法が改正され、企業の感染症報告・海外措置報告が義務化されました。弊社においても、取り扱う製品数の増加及び薬害防止のための規制強化による安全管理情報収集対象の増加により、社内で漏れなく確実に国内外の文献を検索し収集することが困難となりつつありました。そんな折、財団法人国際医学情報センター様（当時の名称）の活動を知り、国内外の学会・文献情報などの安全管理情報の収集・解析の依頼を開始したことが始まりです。

翌年には、弊社独自の依頼として、収集された文献について文献検討票の作成を開始し、今日に至るまで文献の社内評価にて大変参考になっています。

その後、海外企業との安全管理情報交換の共通言語であるCIOMS作成にもお力添え頂きました。当時、国内企業の市販後安全管理業務は、欧米の厳しい規制に対応するため、急激な変化を余儀なくされていました。弊社では海外企業とのライセンス契約が増加し、海外企業との安全管理情報の授受が急増していたことに加えて、海外グループ会社での販売を積極的に展開していました。IMIC様に国内症例のCIOMS作成にご協力頂いたことで、弊社は海外グループ会社が属するそれぞれの国の規制を遵守した報告を行って参ることができました。令和元年からは、さらに海外措置情報の収集にもご協力を頂いています。

これまで申し上げましたように、IMIC様からは時代に即したご提案を頂きながら確実な情報収集にご対応頂いており、Meiji SeikaファルマではIMIC様のお力添えを抜きにして、適切な市販後安全管理業務を行うことができないと申し上げても過言ではありません。収集する安全管理情報は増加の一途をたどっています。IMIC様では、EBM（Evidence Based Medicine）に基づいた信頼度の高い、正確な情報を迅速に提供するために日々研鑽を積んでおられると伺っています。今後も、急速に増加し続ける情報量に対応し、新たなご提案を頂戴しながら、ご一緒に安全管理業務を進めていけるものと期待しています。

令和4年4月に創立50周年を迎えられ、今後も日本の製薬産業の発展に貢献し60周年、70周年ゆくゆくは100周年を迎えられることと存じます。今後のIMICの一層のご発展を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

臨機応変かつ適切な助力で法人化を実現

一般社団法人日本癌学会
理事長
佐谷 秀行 様

この度は、IMIC創立50周年おめでとうございます。私ども日本癌学会は2006年1月よりIMICに事務局業務支援をお願いしており、長年にわたってお世話になってまいりました。複雑な事務業務を私どもの学会の特性を考えて支援してくださり、本当に感謝いたしております。

私どもの学会は2021年に任意団体から一般社団法人に移行しましたが、その際も臨機応変かつ適切にご対応いただき、無事に法人化を達成することができました。学会会員からの問い合わせという日常の仕事から、学術総会における国際セッションの組み立てや学術賞の運営、市民公開講座の開催支援、そして海外の学会との交渉という難しい仕事まで、常に私たちの立場を理解し、親身になって行ってくださっています。そのおかげで学会会員の皆さんに多くの有益な情報を提供できています。

日本癌学会は1万3千人を超える会員で構成されていますが、その個人情報を安全に管理することは極めて重要な課題です。この度日本癌学会は、IMICが長年にわたる多くの学術団体の業務支援の経験を活かして開発された会員管理システムIGMSを導入することにいたしました。安全性と使い易さという本来相反する性質を兼ね備えたシステムとして大きな期待を寄せています。

半世紀にわたって蓄積された多くのノウハウと有能な人材により、さらに守備範囲を拡大され、益々発展されますことを心からお祈りいたしております。

承前啓後

国際医学情報センターの50年

IMICの創設前夜の混乱期から、独り立ちするまでを、慶應の図書館幹部として見守り続けて来た。その後IMIC評議員に転じ、長年にわたりIMICの経営を支えて来た。設立から50年の節目に、IMICの開設前後をアカデミアの眼で総括する。

一般財団法人国際医学情報センター前評議員
元慶應義塾大学環境情報学部教授
元慶應義塾大学研究・教育情報センター本部事務長
澁川 雅俊

財団法人国際医学情報センター（以下「IMIC」）が創設されて50年になる。IMICが行なっている、ある意味でニッチな事業は、次々と新基軸を出し続けなければ空中分解の憂き目を見ることになる。そういう事態に陥るどころか、半世紀にわたり進展に進展を重ねて来られたのは、開設当初から今日までその運営にかかわってきた理事者諸氏ならびにその事業を支え続けた職員諸兄姉の尽力によるところが大きい。

筆者はおよそ四半世紀の間IMIC評議員を務め、その経営に参画する機会に接することとなったが、実は創立当初からその裏側面[1]でかかわっていた。本誌「あいみっくリニューアル」では、設立以降の進展について戸山理事長によって紹介され、またその詳細については50年略史に記されるので、本文では設立前後の事情を振り返ることとしたい。

淵源

IMICの淵源は、1937年に開館した北里記念医学図書館（以下単に「医学図書館」）にある。その形貌の偉容はいまでも正面玄関に偲ばれる。またその外容に止まることなく、その建設趣意書に高らかに発せられた宣言、すなわち「医学の全領域を完備せる図書館を設立し、社会一般の利用に供する」は、その後の医学分野における図書館サービスの発展に如実に顕れている。

同時にこの宣言から、それまでに我が国に本格的医学専門図書館が皆無であったことを読み取ることもできる。事実、医学図書館はその先駆けとなっただけでなく、次々と先端サービスを導入しながら、国内のこの分野の図書館のモデルとされるまでに至り、さらには一般大学・学術図書館をも牽引してきた。

IMICへの進転につながった事例は少なくないが、ここではひとつ挙げておきたい。それは文献複写サービスである。医学図書館ではそれが設立後間もない頃から提供されていた。当時はジアゾ式にせよ、ゼログラフィ式にせよ複写機器はまったく普及していないなかで、光学カメラによる撮影に依っていたことが伝えられている[2]。

図書館への電子複写機の導入は1963年頃から始まり、コイン式複写機は今日どの図書館にも備え付けられており、利用者に便宜を提供するとともに著作権許諾範囲内で文献の流布にも役立っている。その技法は極めて単純である。しかし、これにより後の図

1）義塾体育会関連用地に、増加の一途をたどる全塾図書館所管の図書資料の保存庫（50万冊保管可）が1994年建設された。全塾とは言え、実質的には医学図書館の書庫管理上の処置であったが、保存書庫には図書館のみならずIMIC所管の学術誌バックナンバーの資料も移設されることになったが、さらに学内外の請求を受けて文献複写サービスが実施されることとなった。現在同施設は山中資料センターと称され、全塾図書館およびIMICのサービスの拠点のひとつとなっている。この施設の建設計画は当時研究・教育情報センター本部事務室長であった筆者の立案であった。

2）『塾監局小史Ⅱ』（塾監局小史編集委員会編、慶應義塾、1987年）pp.128

書資料の閲覧様態は、媒体変換によるデータないし情報の私有化へと変容した。

1957年から10年間の医学図書館の進展は目覚ましかった。

1957年-59年

書物の‘守人’（閲覧･貸出･蔵書管理）に徹していた当時の職員15名余りに、開館前30分に基本参考図書の基礎知識習得と解題、図書館学基本文献の抄読を中心とした職場内研修プログラムを実施した。

早朝のことでもあり、反発する者もいたに違いないが、これがその後の業務遂行の基盤となった。

59年

職場内研修で練度を高めた職員を中心に文献調査に軸足を置き、医師・医学研究者などの要求に対応する文献調査を開始。当時国内で参考調査業務（レファレンスサービス）を標榜していた図書館も他にあったが、その内容は辞･事典、年鑑･統計書、図鑑などの基本参考図書の紹介とそれらの利・活用案内に限定されており、医学分野に限定されているとはいえ、それは国内の大学･学術図書館で突出した展開であった。

62年

医学部および病院を支援していた米国財団法人チャイナ・メディカル・ボード資金を得て、館内を全面的に大改造。その施設拡充で翻訳調査室、複写印刷室、講義室などを増設。また施設面に止まらず文献調査業務の拡張に伴いレファレンスサービスから文献分析係を独立させ、特定主題について最新文献の継続的提供を開始。筆者はこの年に義塾三田図書館で参考調査から最初の職務に就いたのだったが、参考調査室はあったものの、翻訳調査室はもとより複写印刷室すらなかった。

66年

文献分析サービスは国内に対するばかりではなく国際的な広がりを見せ、ますます拡張と多様化をたどっている。まず米国国立医学図書館（NLM）と医学部の間に日本医学雑誌文献の索引作成契約が成立。NLMが開発したメドラース（MEDLARS。Medical Literature Analysis & Retrieval System）へ日本の主要医学文献の英訳索引を提供する作業開始。

67年

医学部教室ならびに医局員の協力を得て医学文献の翻訳サービスを開始。69年、日本原子力研究所に対して、放射線ならびに核医学に関する文献抄録提供活動を開始、米国大気汚染技術情報センターに対する我が国の大気汚染関係文献情報を提供。

一般に図書館は図書資料を収集・整理し、保管保存し、その活用を希望する人びとに適宜供与する施設として認知されている。その働きは、森羅万象の認知の記録が初出過程ですべてデジタル化される現在でも変わらない。そして少なくとも1950年代までは、その記録媒体への認識は強く‘書物’感に基づいており、記録の中味にまで深く立ち入ることではなかった。しかし医学図書館の以上の展開を俯瞰すると、そうした旧来の運営・サービスからの脱皮の経過が明らかになる。

‘勇み足’

一個人の強い意思に基づく才能と熱意がその人物を超え、やがては大事業に結実することがこの世にあり得ないことではない。IMICの展開を顧みる時それが実に身近な事例として浮かび上がってくる。

津田良成（71年文学部図書館情報学科教授､1972-76年IMIC常任理事）はもともと医師を目指していたが、太平洋戦争と戦後の混乱がその意志を挫いてしまった。医師になることを諦めた彼は、1947年占領軍民間情報教育局が日本国民の民主化を狙って設置したCIE図書館に職を得た。それが図書館との出会いであり、ほどなくそこで閲覧と貸出と書庫管理が中核の業務であった図書館に、レファレンスサービスと呼ばれる、図書館利用者個々の要求に対応する業務があることを知った。その新規性と重要性に目覚めた津田の、図書館専門職への進転は目覚ましい。1951年義塾文学部図書館学科に入学、1952年北里記念医学図書館に就職、同年に塾派遣で米国イリノイ大学大学院図書館学研究科に留学、同大学医学図書館でインターン、1953年帰国[3]、1957年から医学図書館の改革に邁進する。

津田が総務部長に就任した1969年医学図書館は絶頂にあった。しかし‘好事魔多し’、その絶頂の時に挫折する。相撲で、相手を土俵ぎわに追い詰めながら勢い余って自分から土俵外に足を出してしまい、負けになることを勇み足といい、技ではないが決まり手として成立している。これが一般に転じて、勢いに乗って、やりすぎてしまい、結果として失敗と見なされることもそうよばれる。IMICの設立の背景には、それに似た事情が絡んでいた。

憲法で保障されている学問・研究の自由の保障は、当然のことながら研究発表の自由にも及ぶ。そして図書館はそれを背景に図書および雑誌文献の自由な閲覧を人びとに供与する。しかしそれは内心領域にとどまる。図書館がそのサービスを以上のように拡張化、多様化されるにつれてさまざまな問題が引き起こされる状況をもたらした。とりわけ文献複写サービスの隆盛は、皮肉にも巨額の収益を生みだし、それを資金として多くの非正規従業員を現場採用で雇用することになった。その結果、人事部が正式に認定していない臨時職員が正規職員の５倍以上の百名ほどにまで膨れ上がることになってしまった。また図書館の円滑な運営を阻害する事態を招いてしまうことにもなった。私立学校法や大学設置基準、さらには労働基準法などの法制に基づく義塾全体の管理体制、とりわけ適正な財政規律や正当な人事管理をも揺るがしかねない混乱をもたらした。今でいうコンプライエンスの問題である。

向後

津田の医学図書館専門職意識はそれらに超然としていたが、医学図書館周辺（医学部事務管理、全塾図書館管理を捲き込む）はいわばカオスであった。IMICはそうした状況を背景にして敢然と誕生した。

周辺に数人の賢い人たちがいた。それは義塾内部に止まらず､政府機関（当時の文部省と厚生省）の中にもいた。その人たちのことをいまここで明らかにすることはできないが、彼らは知恵を絞った。その基準系になったのが日本科学技術情報センター（JICST。現在国立研究開発法人科学技術振興機構JST）である。この機関は1957年、科学技術文献情報サービスの効率化を期するために科学技術庁によって設立されていた。しかしJICSTには医学・医療および薬学・薬事にかかわる資源資料の蓄積がなかった。一方医学図書館はすでにそれらの分野の国内の資源図書館として成長し、学外利用者にその資源を提供してきており、その隙間を充たすことができる有力な存在であった。かくしてIMICは、1972年学校法人慶應義塾から独立し、財団法人として設立された。以来半世紀にわたり、医学・医療および薬学・薬事情報サービスの分野で異彩を放つ発展を示してきた。

さて向後のことである。図書や雑誌など情報資料を収集、組織、保管・保存して利用に供するのが一般の図書館の基本的役割である。情報資料の中味（コンテンツ）は一次情報と位置付けられて重要視されてはきたが、図書館ではその中味に深く立ち入ることはなく、その媒体情報である二次情報を詳細に分析・体系化することによって一次情報を検索する装置（図書目録）を構築することに腐心されてきた[4]。

図書館業務にコンピュータがさまざまに導入された1960年代に入ると情報資料の組織化に変化が顕れた。医学情報サービス分野では、とりわけNLMが開設したMEDLARSがそれを一変させる。MEDLARS（MEDLINE、あるいはMEDLARS-ONLINE）の世界ではもはや目録は歴史的な存在であり、索引誌も超えて、二次情報データベースが一次情報のへのアクセス装置となった。その装置を制作する情報サービス専門職の一次情報コンテンツへの関与は図書館専門職の比でなく深い。それは二次情報にコンテンツ要旨すなわち抄録が加えられているだけでなく、そのコンテンツから抽出された医学専門主題検索語（MeSH。Medical Subject Heading）が多数付与され、利用者サイドの検索効率と効果を最大限に支援した。

医学・医療情報や薬事・薬学情報に限らず、森羅万象にかかわるデジタルの生成・蓄積・利活用の今後の総合的体系化のありようにもよるが、向後のことについて一言述べておきたい。これまで一次、二次などと情報の位相の違いによる情報サービス様態について触れてきたが、それに〇次情報、つまり論文、報告、文献などにまとめられる以前の‘生’データに関与することを付加することができないだろうか、という想いである。それらは幸いにもIMICのごく近くに豊富に存在している。それに関与することは、おそらく現組織・機構の枠組みを超えることになるだろう。それは単なる想いではなく、大それた野望かもしれないが、IMICはこの50年その枠組みを超えてきた。コンピュータ・システムがMEDLARSの世界を創成したように、人工知能（AI）がその枠組みを融合することによって新たな世界を創成するかもしれない。そしてそれは結果としてグローバルスタンダードを確立することに繋がるにちがいない。

3）津田良成「情報と医学図書館と私」（情報の科学と技術、Vol.48,no.6, 1998. Pp.375-9）

4）澁川雅俊 『目録の歴史』（勁草書房、1985年、222p.）

IMIC創立50周年に寄せて

高田 宜美

IMICが事業組織として軌道に乗るまでの間、経営が安定しない時代のトップの傍らでトップを支え、経営上のさまざまな困難に立ち往生しながらも、これを乗り越えて来た高田氏が往時のIMICをしのぶ。

（一財）国際医学情報センターは昭和47年（1972年）４月に設立されましたので、本年は50周年となります。設立時から勤務して経営危機も体験した旧職員として、晴れやかに50周年を迎えられたこと、大変うれしく思います。おめでとうございます。

1972年（昭和47年）の２月頃に突然、医学情報センターの封筒で「新設される（財）国際医学情報センター職員に採用されました。つきまして一度、訪問して下さい」との封書が届きました。私としては就職を希望したことも医学情報センターの存在も全く知りませんでしたが、興味半分出かけてみました。

そこで当時50歳の真冬なのに半袖のエネルギッシュな津田良成先生（当時、医学情報センター副所長）とお会いし仕事内容を伺いました。慶應義塾の図書館情報学科の卒業生が多いようで、私は他大学の英文科卒で図書館学は全く知りませんでしたが、海外との業務、米国の医学図書館（National Library of Medicine）、東南アジア（South-East Asia Medical Information Center）関係業務などの説明を聞き、これなら少しはお役に立てるかもしれないと思い、就職を決めました。

4月1日に医学情報センターの２階の会議室で新人を対象とした研修会に参加している時に、突然呼び出しがあり、堀事務局長から「新しく橋本孝理事長（慶應義塾学事顧問）が就任されるので理事長秘書になってほしい」との依頼がありました。とても気難しい人だから新卒の人では務まらないからとのことでした。

その後は研修を受講せず、4月19日に開催される理事会、評議員会、設立披露パーティの準備のお手伝いをすることになりました。当然ながら準備に当たった人はすべて医学情報センターの職員で新しく入職した人はいませんでした。

昭和47年（1972年）4月19日、ホテルニューオータニで理事会、評議員会を開催し、その後、会場を移して盛大な披露パーティが行われました。慶應義塾関係、医師会長、文部省、厚生省、外務省などから錚々たる代表の出席がありました。ここに至るまでは慶應義塾の中で相当の軋轢、いきさつがあったようですが、ともあれ、華々しくスタートいたしました。本部は登記上、旧野口記念館に隣接する野口ハウスの306号室でした。

しかし、アルバイトを多く引き継いだにもかかわらず就業規則もなし、ないづくしの新組織でした。大卒の初任給は月額４万円と安いものでした。また、独立したにもかかわらず、総務の責任者は医学情報センターの職員でした。また、規約類が設定されてなく、まず慶應義塾や他の組織の就業規則をみて、IMIC就業規則を作成する所からスタートしました。経理関係の規則もその段階ではありませんでしたから回収されない未収金が膨れ上がっていきました。

こうして1年後に総務、経理部門ともに医学情報センターと切り離してIMIC職員が単独で運用することになりました。

情報産業が脚光を浴びだした時期でしたが、昭和50年の冬のボーナスは一部のみ支払い、残額は翌年51年の４月に津田常務の個人補償で銀行から借り入れ支払いました。私は在職中に２度の財政危機に遭遇しましたが、その第１回目の経営危機です。津田常務はこの責任を取り、微生物の牛場教授に理事長就任を依頼し、５月の理事会で牛場理事長が選出された段階で退任されました。牛場教授は慶應義塾の医学部長、医学図書館長、日本医学図書館協会会長の経験がありましたので対外的にも最適な方だったと思います。

津田常務の退任後、慶應の図書館情報学科で共に１期生だった藤川正信氏が特別顧問から業務本部長に就任し、業務の立て直し、新事業の立ち上げなどIMIC職員だけのブレーンストーミングが開催されました。これにより文献複写業務の立て直しを決定し、医学情報センターの受付とは別に地下にIMIC専用の受付を設置し、また出納方式と変更することになりました。その後は時代の要請もあり原論文調達業務の収入は増大し、職員の給与の７割程度を支えていくことになります。しかし、経営上の失敗から昭和51年10月から慶應義塾から事務局長（しばらくして常務理事）、一時期は業務部長も出向者としてお迎えすることになりました。

その時期、最も印象に残った有意義な業務がありました。米国のNLM（National Library of Medicine）に日本の医学文献の書誌情報を医学情報センターから引継ぎ提供していましたMEDLARSが終了した後、昭和51年（1976年）11月30日付で米国国立がん研究所(National Cancer Institute)との契約が成立しICRDB（International Cancer Research Data Bank）に日本の主要雑誌20誌に掲載されているがん文献の英文抄録、書誌情報の作成を国内で著名ながん研究者のご協力で行うことになりました。IMICにとって大変有意義な業務だったと思います。当初の契約は3年でしたが、２年延長されて5年間のプロジェクトでした（1976年～1981年）。その成果もあり昭和57年(1982年)にあいみっく10周年記念特別号が出版された際にはがん治療に関する記事が多く、公開セミナーでもがん治療の動向が取り上げられました。

このような中で昭和57年（1982年）5月に設立10周年パーティが国際文化会館で開催されました。慶應義塾大学医学情報センターの業務を発展的に継承しつつ、我が国の医学・医療情報の専門センターとして独自の活動が評価され出しました。出席者からもよく持ちこたえたねとの発言もあり設立後の苦難を乗り越えたことを思い出し感慨無量でした。

JMLA（日本医学図書館協会）がホストとなり、5th International Congress of Medical Librarianship (ICML)が市ヶ谷の日大会館で昭和60年（1985年）10月開催されました。

昭和50年10月にJMLAの第１号の協力会員として認められました。それまでは医学情報センターの名前で文献複写依頼をしていましたが、以後IMICとして申し込みが可能となっていましたのでこの国際会議を応援し500万円の寄付金をいたしました。WHOが参加者への援助を行い、アフリカ、アジアからの参加者も多く当時担当していた国際協力課の業務として英文抄録の作成、海外との連絡など(当時はテレックス）を経験することができました。統計では64か国567名の参加者でした。

それからしばらくは時代の要請と共に事業も拡大し安定的な運営が行われました。が、次に2回目の経営危機がきました。平成５年（1993年）４月から製薬協（日本製薬工業協会）は公正取引、特に医薬品の適正使用のための情報収集・提供について製薬企業倫理綱領、医療用医薬品プロモーションコードを作成し、厳格に実施されることになりました。ある程度の予想はしていたものの、これほどまでに変化するとは想像しておらず、文献複写、検索業務の申込が激減しました。アルバイトをはじめ職員の退職勧告など行い、予算書を修正し、年度末には約3割の収入、それに合わせて人件費を始めとする経費の節減に努めて何とか凌ぎました。筆者は情報資料の担当でしたので夜間の複写部門の責任者であった故加藤均さん（その後、常務）と二人三脚で頑張ったつもりです。心身ともに辛い時期でしたが、貴重な経験でもありました。製薬協の上部機関の日薬連（日本製薬団体連合会）との協議で賛助会員会社に寄付金を募ることになり斎藤理事長始め管理職が手分けしてお願いに行きました。製薬協、日薬連には感謝の言葉しかありません。

設立以来、医学情報センターでの間借り、いくつかのビルに分散して勤務していましたが信濃町駅前の煉瓦館が新築され、谷戸常務のリーダーシップで平成７年６月に移転し、設立後23年経過して初めて全職員が同じ場所で勤務することができました。このことはユーザーにとっても職員にとっても格段に効率が上がりました。

平成５年の経営危機も乗り越え新築の煉瓦館に移転した２年後の平成９年10月３日（1997年）に明治記念館で創立25周年の記念式、記念パーティが挙行されました。

続いて11月14日に大阪のニューコクサイ、12月１日に東京のアルカディアで記念講座が開催されました。その年にあいみっく創立25年記念号が出版され、翌年創立25周年特集号が発刊されました。その内容も10周年の時と違い、インターネットの活用、情報のデジタル化と内容が一変しました。その後、さらに25年経ち、50周年を迎えましたが、今後も時代の変化と要請を受けて、さらに発展していくことを期待しております。

HISTORY of 50 years INTERNATIONAL MEDICAL INFORMATION CENTER

1972年 創立パーティ

1977年 情報誌「あいみっく」創刊

1970年代に導入された機械

1972

- 最新の医学・医療情報を提供するダイアル・アクセス（DA）サービス開始
- 日本医学図書館協会（JMLA）に協力会員として加盟
- ライフサイエンスに関する調査研究を受託（理化学研究所）
- 海外派遣者の健康管理システム（青年海外協力隊：JOCV）

1973

- 厚生省より医学用語コードおよびシソーラスに関する調査研究開発を受託
- 医学情報源データベースの開発

1974

北里記念医学図書館

1972年 第1回理事会・評議員会

- 文部・厚生両省認可のもと、**慶應義塾大学医学情報センター（北里記念医学図書館）**を母体に財団法人として発足
- **文献複写**、MEDLARS 索引（米国国立医学図書館：NLM）、国際原子力情報システム（INIS）検索等の業務を継承
- 野口ハウス 306 号に本部設置
- 第 1 回理事会、評議員会開催
- 賛助会員制度導入

1975

- 科学技術情報の全国的流通システム（NIST）の中で医学分野の専門センターに位置づけられる
- 「学術雑誌総合目録自然科学欧文編」発刊（文部省）（以後継続）
- 指定疾病医療内容改善に関する研究（環境庁）（以後継続して各種調査研究を受託）

1976

- 米国国立がん研究所（NCI）と International Cancer Research Data Bank（ICRDB）の業務契約を締結
- 疾病名コード開発（MEDIS-DC）
- 「ステッドマン医学辞典」翻訳（メディカル・ビュー社）

1977

- **医学情報誌「あいみっく」創刊**
- 文献複写サービスをカウンター受渡し制に変更
- JOIS 専用端末機の導入により機械検索を開始
- 英国 British Library Lending Division（BLLD）とオンライン接続

1978

- JICST との間に「検索指導契約」を締結、JOIS の普及に協力
- 医療情報システムの基本問題に関する海外実例の調査を受託（MEDIS-DC）
- オンライン MEDLARS 検索講習会を JICST、JMLA との共催で開催
- 「昭和 53 年総合レビュー医学情報の現状と展望」編集（科学技術庁）

1979

- 「雑誌記事索引（医学・薬学編）」の原稿作成・編集（国立国会図書館：NDL）
- EPA マイクロシソーラス翻訳（国立公害研究所）

1980

業界の動向

- 財団法人日本医薬情報センター（JAPIC）創立
- 日本科学技術情報センター（JICST）MEDLARS のバッチ検索サービス開始
- ロッキード社（米）DIALOG サービス開始
- British Library Lending Division（BLLD）（英）発足
- 財団法人医療情報システム開発センター（MEDIS-DC）創立
- 西独・情報ドキュメンテーション計画（IuD プログラム）発表
- 日本ドクメンテーション協会（後の情報科学技術協会）が社団法人として認可
- 日本科学技術情報センター（JICST）・オンライン検索システム（JOIS-1）完成
- BRS 社（米）BRS サービス開始
- JICST・JOIS の公衆回線サービス開始
- EURONET 本格サービス開始
- ICAS 公開
- DIALOG オンラインによる国内サービス開始
- 薬事法改正

1981

IMIC ライブラリーを設置

医療協力プロジェクトに対する学術資料の提供（国際協力事業団）（以後継続）

1982

1982年 創立10周年記念公開セミナー

財団創立 10 年

創立 10 周年記念式典を挙行

記念行事として公開講座・公開セミナーを開催（東京・大阪）

「あいみっく」創立 10 周年記念特別号発行

国内がん文献データベース（JCLDB）構築開始

1982年「あいみっく」10周年記念特別号

業界の動向

- JOIS- II サービス開始

1983

第 21 回日本医学会総会（大阪）にて学術展示、以後各種学会・展示会等に出展

1984

大阪分室開設

「IMIC 学術雑誌所蔵目録」発刊（以後継続）

IMIC学術雑誌所蔵目録（1997年版、2005年版）

「Cumulated List of New MeSH for Online User.1974－8」編集・発刊

英文データベース作成のための和文標題英訳（JICST）

- 国際電電・ICAS を国際標準の国際公衆データ伝送サービス（VENUS－P）へ統合

1985

1986

喫煙と健康問題に関する文献調査・収集（厚生省）

医療研究者名簿データベース作成（MEDIS-DC）

四谷曙橋ビルへ移転・統合（総務・開発部門）

「ダイアル・アクセス（DA）24 時間サービス」開始

- 米国・日本技術文献法成立
- 学術情報センター（NACSIS）創立
- BLLD が British Library Document Supply Center（BLDSC）に名称変更
- 第 1 次医療法改正

1987

財団創立 15 年

創立 15 周年記念パーティー開催

創立 15 周年記念公開講座・公開セミナーを開催（東京・大阪）

「医学洋書総合目録」編集（JMLA）（以後継続）

1987年「あいみっく」15周年公開セミナー特集号

- 第 1 回科学技術と商業に関する日本情報国際会議開催（英国）
- STN International サービス開始

1988

1989

自然語－統制語変換辞書データ作成（JICST）

韓国医学図書館協議会（KMLA）への文献複写提供開始

治験医師情報システムの開発（MIC と共同開発）

- JOIS- III サービス開始

1990

学会・研究会医学情報データベースの構築開始

大阪分室を三星高麗橋ビルに移転

「現行医学雑誌所在目録」編集･発刊(JMLA)（以後継続）

人口家族計画プロジェクトに対する学術資料の提供（JICA）（以後継続）

医薬品学術文献速報・データベース作成サービス開始

1993年 煉瓦館

信濃町煉瓦館に本部・東京事業所を移転

「日本の医学会会議録データベース」を NACSIS-IR に提供開始

「医学雑誌特集記事案内」（月刊）発刊（以後継続）

「日本の医学会会議録 CD-ROM」発刊

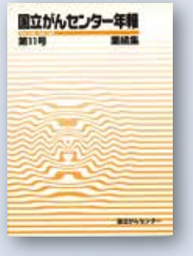
「がん情報 FAX サービス」

「厚生労働省特定疾患研究 CD－ROM」販売

大阪分室を豊田日生北浜ビルへ移転

IMIC ホームページ（テスト版）公開

国立がんセンター年報 編集・発刊（国立がんセンター）（以後継続）



複写・検索 Web 申込システム**「IMICOrder」**開始

学会事務室を新設、**学会事務代行サービス**開始

「医学・薬学学会サポートサービス」開始

EBM 支援センター開設

診療ガイドライン作成支援等業務開始

日本の医学会会議録データベースが、科学技術振興事業団のオンライン検索システム JOIS よりゲートウェイ接続検索提供開始

IMICWeb にて Web メンバーズサービスを開始

1991 1992 1993 1994 1995 1996 1997 1998 1999 2000

東京本部を野口ハウス及び内藤町ビルディングに移転

87 医中誌－93JICST シソーラス用語対応辞書データの作成（JICST）

慶應義塾大学山中資料センター運営業務の受託開始

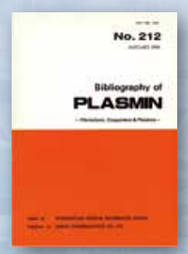
国内医薬品副作用情報サービス「SELIMIC」開始

「医学会･研究会開催案内」（月刊）（冊子体）発刊（以後継続）

「SELIMIC 国内医薬品副作用文献集」（月刊）発刊（以後継続）

「Annual Report, National Cancer Center」編集・発刊（国立がんセンター）（以後継続）

SELIMIC
SafEty information Literature in IMIC



財団創立 25 年

創立 25 年記念式典を挙行

記念講演会、記念パーティーを開催

IMICWeb（副作用情報 SELIMIC Web、MMWR 日本語抄訳版、特集記事情報）の公開

文部省「科学研究費補助金研究成果公開促進費〈データベース〉」交付

プラスミン文献目録（編集）発刊（以後継続）

病原微生物検出情報 CD-ROM（編集）発刊（以後継続）

MedDRAJ のビューワソフト「MedDRA Navigator」を製作販売開始

「海外医薬品文献速報サービス」開始

環境庁企画調整局環境保健部慢性砒素中毒に関する文献調査受託

業界の動向

- 日本製薬工業協会（JPMA）「医療用医薬品プロモーションコード」実施
- 第 2 次医療法改正
- JICST が科学技術振興事業団（JST）科学技術情報事業本部に名称変更
- 薬事法に基づく感染症報告、外国措置報告の義務化
- 医薬品・医療機器等安全性情報報告制度開始
- 臓器移植法施行
- 秋田新幹線、長野行新幹線、東京アクアライン開業
- 厚生科学審議会に生殖補助医療技術専門委員会設置
- 産科婦人科学会が受精卵診断を条件付きで承認
- 長野冬季オリンピック、パラリンピック開催
- 明石海峡大橋開通
- 感染症予防法施行
- 改正男女雇用機会均等法施行
- 西暦 2000 年問題対応
- GPMSP 省令一部改正、市販直後調査導入
- 介護保険法施行
- 薬害エイズ事件で旧ミドリ十字の歴代 3 社長に実刑判決
- 雪印集団食中毒事件

IMICユーザー会

学会情報管理システムを IMICWeb 上で公開開始

国立情報学研究所 インパクトファクター調査受託

SELIMIC Web リニューアル

IMICOrder コーポレート版を公開

「生物由来製品感染症速報サービス」 開始

IMICユーザー会

「医薬品の適正使用情報作成サービス」 開始（「医薬品インタビューフォーム」の改訂･管理支援、「くすりのしおり」、「患者医薬品ガイド」等の代行作成）

著作権新基幹システム開始

「SELIMIC」 リニューアル（グローバル GVP 対応）
（「New-SELIMIC」の提供を開始）

文献情報統合管理システム「I-dis」 Version.2 提供開始

研修委員会 設置

大阪分室移転

「海外著作権処理代行業務」開始

IMICWeb の英語版更新、RSS を用いた新着情報提供開始

2001 2002 2003 2004 2005 2006 2007 2008 2009 2010

第一回**ユーザー会**開催（以後 2020 年を除き毎年開催）

著作権管理システム運用開始

所蔵雑誌目録 Web 版を公開

学会・研究会開催案内情報提供開始

「改正薬事法対応サービス」 開始 **（Medical Device Alert、SELIMIC Web Alert、受託安全確保業務）**

IMICWeb リニューアル

慶應義塾大学信濃町メディアセンター運営支援

プライバシーマーク取得

IMICOrder リニューアル

経済産業省 情報大航海プロジェクト「すこやかライフサポート･サービス」実証事業受託開始

「あいみっく」リニューアル

2007年「あいみっく」

文献情報統合管理システム「I-dis」 提供開始

煉瓦館近傍に新オフィス -IMIC アネックス開設

2009年アネックス外観

業界の動向

- 中央省庁再編により厚生労働省発足
- 第十四改正日本薬局方施行
- 第四次医療法改正
- 米同時多発テロ
- 健康増進法施行
- 「がん拠点病院」に 5 医療機関を初指定
- 学校週 5 日制完全実施
- 薬事法改正（生物由来製品制定）
- 医薬品・医療機器等安全性情報報告制度の薬事法制化
- 副作用・感染症報告の電子的報告受付開始
- アジアで重症急性呼吸器症候群（SARS）集団発生
- 学校教育法・薬剤師法一部改正公布
- 独立行政法人医薬品医療機器総合機構発足
- 薬剤師養成教育六年制へ
- 国立大学が国立学校法人へ移行
- 薬事法改正（安全確保対策の充実）
- GQP、GVP、GPSP 省令施行
- 介護保険法改正
- 個人情報保護法施行
- 第十五改正日本薬局方施行
- 65 歳以上の高齢者の割合が初めて 20% を超す
- 薬事法改正（違法ドラッグ対策の強化）
- 第五次医療法改正
- 日本年金機構法制定
- 緊急地震速報運用開始
- 郵政事業民営化
- 介護保険法改正
- 後期高齢者医療制度開始
- メタボリックシンドローム対策義務化
- リーマンショック
- 薬事法改正（一般用医薬品の分類による販売規制緩和）
- PM2.5 の環境基準決定
- 民主党政権発足
- 裁判員制度開始
- 家畜口蹄疫で宮崎県知事が非常事態宣言
- 薬害肝炎検証・検討委員会の最終提言
- 日本年金機構発足
- iPad 発売

IMIC 国際医学情報センター 50年の歩み

2011

2012

財団創立 40 年

市民向け **「せりみっく広場」** を開設

文献情報統合管理システム (I-dis)、導入企業全てが Ver.2 への移行完了

2013

公益法人制度改革関連法に基づいて一般財団法人へ移行

IMICWeb 全面リニューアル

販売管理システム導入

2014

IMICユーザー会

「海外医薬品安全性情報」 サービス開始

信濃町煉瓦館事業スペース増床・改修

人事管理システムを導入

2015

電子ファイルによる文献デリバリーサービス「IMICOrder+」 開始

情報セキュリティ委員会 設置

2016

I-disユーザー会

テレワーク導入

第一回 I-dis ユーザー会開催

2018

「海外措置情報速報サービス」 開始

学会会員管理システム「IGMS」 提供開始

文献情報統合管理システム「I-dis」Version.3 提供開始

制度改革統括部門 **組織開発室** を新設

電子契約システム導入

ワークフロー導入

「マイナンバー対応プロジェクト」発足、マイナンバーの取得・運用を開始

BCP (事業継続計画) 策定開始

2020

2021 年度 IMIC ユーザー会（オンライン初開催）

品質保証推進室 を設置

IDaaS 導入

タレントマネジメントシステム導入

SFA（営業支援システム）導入

2021

財団創立 50 年

ISMS（情報セキュリティマネジメントシステム）認証取得（文献情報統合管理 Web サービス）

「DEVICE SAFETY BASE」 サービス開始

「DI-rect」 サービス開始

2022

業界の動向

2011
- 第十六改正日本薬局方施行
- 介護保険法改正
- 東日本大震災
- イレッサ訴訟

2012
- 医薬品リスク管理計画（RMP）策定の義務化
- 山中伸弥氏ノーベル生理学・医学賞受賞
- 自民党政権発足
- 東京スカイツリー開業

2013
- 予防接種法の一部を改正する法律公布（Hib 感染症、小児の肺炎球菌感染症、ヒトパピローマウイルス感染症の定期予防接種）
- 小児がん拠点病院に 15 施設を指定

2014
- 医薬品医療機器等法施行（薬事法から名称変更）
- OTC 医薬品のネット販売解禁
- 介護保険法改正
- 第六次医療法改正
- WHO、エボラ出血熱感染の緊急事態宣言
- デング熱で代々木公園立入禁止
- STAP 細胞論文をめぐる騒動

2015
- 大村智氏ノーベル生理学・医学賞受賞
- C 型肝炎治療薬の高薬価収載
- 厚労省がノバルティスファーマに副作用報告義務違反による初の業務停止命令
- 第七次医療法改正
- 日本年金機構より大量の個人情報流出

2016
- 第十七改正日本薬局方施行
- 大隅良典氏ノーベル医学・生理学賞受賞
- TPP 協定署名
- 新元素となる元素番号 113「ニホニウム：Nh」認定
- 子宮頸がんワクチン副反応集団訴訟
- 出生数が戦後初めて 100 万人を割る
- 北海道新幹線開業

2017
- 第八次医療法改正
- 介護保険法改正

2018
- 第九次医療法改正
- 本庶佑氏ノーベル医学・生理学賞受賞

2019
- 薬機法改正（先駆け審査指定制度、条件付き早期承認制度等）

2020
- 新型コロナウイルス感染症が世界各地に広がる

2021
- 第十八改正日本薬局方施行
- 添付文書の電子的提供の原則化
- 新型コロナウイルスワクチン接種開始
- 東京オリンピック、パラリンピック開催

IMICにはたくさんの“アイ”がある

私たち国際医学情報センターは、1972年に慶應義塾大学の北里記念医学図書館を母体として設立されました。それから半世紀にわたり、日本の健康社会を信頼できる情報で支えるべく活動を続けてまいりました。これから先の100年もたくさんの“アイ”にあふれるサービスで、輝く未来への架け橋となるよう、歩みを進めてまいります。

100年先の健康社会のために…

一般財団法人国際医学情報センター

IMIC
International Medical Information Center

医学・薬学・医療の情報に特化し生まれたサービスは

ひとつひとつ信頼を積み重ねながら成長を続けます

安全性情報

医薬品や医療機器の安全性に関する各種情報を
迅速に収集・提供し、GVPへの対応を万全にサポート

学術文献入手

幅広いネットワークを利用し、迅速かつ確実に必要な文献を
入手可能です。各サービスとの連携もIMICならではの強み

データベース構築

文献情報統合管理システム「I-dis」の提供から、
コンテンツの作成・登録・管理まで、きめ細やかなサポート

情報収集・査読・サマリ

商用データベース検索や文献スクリーニングによる
精度の高い情報収集をはじめ、文献査読やサマリ作成も連動

資材作成

インタビューフォームや製品情報概要、FAQ作成まで、
医薬情報のエキスパートが高品質な資材作成をトータルサポート

翻訳・英文校正

長年の実績と経験から、高品質な翻訳関連サービスを
迅速にご提供。CIOMS、不具合報告書業務も展開

IMIC

設立当時より提供を開始した、IMICの根幹となるサービス
文献複写／データベース検索／翻訳・英文校正

しっかりと大地に根を伸ばし、その幹から枝分かれするように
多様なサービスが、お客様のニーズと共に生まれました

私たちにできることの総合力で、その課題の解決に挑む

What we can do to solve the issue

IMIC主要サービス一覧

私たちIMICは、時代や環境の変化によるニーズにいち早く対応し、新たな挑戦を続けます。
ここにあるサービスがやがて全てではなくなり、今ここにないサービスを未来のあなたへ…

安全性情報関連サービス

受託安全確保業務
GVP省令によって定められた安全管理情報の収集および文献査読・フィルタリング業務を、GVP契約のもと受託体制を構築し実施いたします。

SELIMIC-Alert
IMIC作成の国内医薬品安全性情報データベース(SELIMIC)から、指定の医薬品の安全性情報を速報として定期的に提供いたします。国内の文献・学会情報収集に最適です。

海外医薬品安全性情報
医薬品の安全性に関する海外文献・学会情報を商用データベースから検索し、定期的に提供いたします。検索式の立案および管理、検索結果の保存により監査対応も安心です。

海外措置情報速報
海外各規制当局のWebページで発出される日々の更新情報を収集し、安全性関連の情報に絞り込み、速報として提供いたします。指定の医薬品名で絞り込んだ情報もお送りします。

生物由来製品感染症速報
感染症定期報告制度に対応し、国内外の文献・学会情報や規制当局情報をフィルタリング結果と共に提供いたします。感染症定期報告書（案）の作成もサポート可能です。

CIOMS作成
国内症例のCIOMSフォーム作成や海外から届くCIOMS情報の和訳など、各種翻訳をサポートいたします。部分的な翻訳やお客様の仕様に合わせた作成も可能です。

DEVICE SAFETY BASE
医療機器に関する国内外の文献・学会情報や不具合・回収情報を収集し、定期的に提供いたします。監査に備え検索式管理等のサポートを強化した新サービスです。

医療機器不具合報告書作成
様々な医療機器関連業務の受託により培った経験をもとに、外国症例の翻訳および不具合報書XMLファイル作成をサポートいたします。日本語症例にも対応しています。

資材作成関連サービス

医薬品資材作成
適正使用情報資材からプロモーション資材まで医薬品の各種資材作成をサポートいたします。資材の作成・改訂の一括管理によって作業負荷を軽減いたします。

FAQ作成
口頭回答用、文書回答用のどちらのFAQも作成可能です。また、既存FAQのリバイスにも対応しており、引用文献のエビデンス確認など、付随業務も実施可能です。

DI-rect
医薬品資材を、従来のPDFではなくHTML形式で活用するために開発された全く新しいコンセプトのWeb検索システムです。添付文書とインタビューフォームの比較ナビ検索が便利です。

著作権ライセンス処理
図表転載やリプリント文献の手配など、豊富な対応経験をもとに国内外問わず様々な学術コンテンツのライセンス処理をサポートいたします。

データベース構築／学術文献入手

文献情報統合管理「I-dis」
学術文献や製品情報の一元管理、情報の効率的な利活用と適切な情報提供環境をシステマティックにサポート。ご利用のニーズにあわせて3つのパッケージプランを選択いただけます。

コンテンツデータ作成
抄録作成やインデキシング付与、ON/OFFラベリング業務など、文献情報を管理する上で必要となる自社品に特化した情報を付加し、内容把握や効率的な情報検索に役立ちます。

データベース検索／SDI検索
専門のサーチャーがご要望にそった検索式を立案し、商用データベースを用いて国内外の文献情報を提供いたします。SDI検索は自社製品の定期的な情報収集に最適です。

国内医学／医薬品文献速報
IMICが所蔵する医学雑誌や学会抄録集を独自の手法で査読し、ご指定の主題に沿った情報を毎週速報で提供いたします。

文献複写
IMICおよび提携図書館所蔵の学術雑誌、学会・研究会のプログラム・抄録集、単行本などの複写物をスピーディに提供いたします。著作権処理も適切に実施いたします。

学術文献電子デリバリー
国内外の医薬系ジャーナルに掲載された論文を網羅した学術文献の電子デリバリーサービスです。DRM制御により安心して電子ファイルをご活用いただけます。

翻訳・英文校正

翻訳
医学・薬学分野のあらゆるドキュメントの翻訳を承ります。和文英訳はEnglish native speakerによるチェックを経て納品いたします。できるだけ迅速に、正確で適切な文章に訳します。

英文校正
医学・薬学関連の各種英文ドキュメントを、豊富な専門知識を持つEnglish native speakerが校正し納品いたします。正確で適切な文章を、生きた英語として読み手に伝えます。

学術団体支援

医学会・薬学会サポート
医学系学会運営に必要な各種管理業務をIMICスタッフが代行し運営をサポートいたします。事務局代行をはじめ、総会等の会議運営、学会誌編集等対応は多岐に渡ります。

会員管理システム「IGMS」
学会事務局業務の根幹となる会員管理や会費請求業務などを一元的に管理できる、学術団体に特化したIMIC独自の会員管理システムです。

ガイドライン作成支援
各種診療ガイドライン作成にあたり、企画からエビデンス情報の収集、本文執筆、出版まで、進捗管理業務を含め、一括して経験豊富なスタッフがサポートいたします。

INTERNATIONAL MEDICAL INFORMATION CENTER

あいみっく
2022年秋号
（Vol.43-1）
発行日：2022年9月30日
ISSN 0386-4502
発行人：戸山 芳昭　広報委員会：秋本恒雄、本田博哉、林拓也
「あいみっく」リニューアルチーム：藤原亮太、荒居美香、藤田法子、中庭亜理沙、菊地美代子、小笠原礼奈、坪内秀太、皆川雅子、糸川麻由　年表編集協力：田丸幸一
発行所：一般財団法人国際医学情報センター
〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地 信濃町煉瓦館
TEL. 03-5361-7080
E-mail：henshu@imic.or.jp
https://www.imic.or.jp

IMIC
International Medical Information Center

サービスに関するお問い合わせ

営業課　03-5361-7094
market@imic.or.jp